

第37回 福島県建築文化賞 各作品賞 講評

【正賞】

『須賀川市民交流センター tette』は、図書館を中心として公民館、子育て施設、円谷英二ミュージアム、さらにはコンビニまでを複合し、市民誰にも開かれた新しいタイプの活動・交流施設である。「あそぶ」「まなぶ」「あつまる」等のテーマ毎に設けたフロアを吹抜けにより有機的に積層し、建物の内外にダイナミックな空間と形態を創出するとともに、それらを結ぶスロープや階段に面して大小様々な空間を設け、場所に応じたテーブル、椅子、書架・展示棚等により、思い思いの活動の場、居場所を選ぶことができる。街路整備が進められてきた表通りに面したエントランスから続く tette 通りと名付けられた通り抜け空間には、コンビニ、カフェ、イベントスペース等が設けられ、それ自体が街のような建築となっている。延べ 35 回に及ぶというワークショップなど市民参加による計画プロセス、市民も一体となった運営と合わせ、共創のまちづくりが魅力的な空間として結実している。

【準賞】

『スマートシティ AiCT』は、歴史と伝統を重んじる城下町に、未来に向けて経済活動発展の拠点とすべく構想された、ICT 関連事業や会津発ベンチャー企業が入居するテナントオフィスビルである。これを単なる建築事業ではなく、鶴ヶ城を望む桜並木、酒蔵に直面するとい敷地のもつ特長に着目し、失われかけてきたまち中心部の歴史的景観の価値を市民に再認識させ、またその価値が外からの企業の参入や人の流れを生み出す力としようとした設計者をはじめとする関係者の構想は高く評価される。通りに面して周囲の建物に合わせて高さを抑えた木造平屋の交流棟を配置することにより周囲の環境と馴染ませるとともに、街並みの連続性を生み出し、これと中庭を挟んで中層のビジネス棟を配置することで必要な機能・ボリュームを確保しており、また、内外に地域材や CLT 等を多用し、企業同士、また地域や学校との交流連携を生み出す開放的で心地よい空間づくりがなされている。地域の活性化と歴史的景観を生かしたまちづくりを見事に両立している。

【優秀賞】

『埜町立はなわこども園』は、4mの天井高を持つフレームの棟を折り曲げて配置することにより、内外が一体となる空間構成をもつ。保育室としては類を見ない天井高と言えるが、鉄骨の細い柱以外の構造体が見えないようにし、町の木材と地元の職人の技術による木製の建具や内装があいまって、開放感と温かみのある子どものための空間を生み出しており、新鮮である。道路に面して地域に開かれた大きな軒下空間や広場、地域利用が想定される諸室を設け、その先に園舎や園庭を配置することにより、セキュリティを確保しつつ子どもの活動の様子が目に入り、子どもがまちの宝であることを示す建物となっている。

『いわきワイナリーガーデンテラス』は、緩斜面のぶどう畑を見下ろす丘に、遠望できる山の眺望まで取り込んで立つ木造のワイナリー建築である。建築・家具・造作が一体となり、細部までデザインの配慮がなされ、木の建築の力が加わることにより、小規模ながら存在感のある建築、気持ちのよい空間となっている。障がい者の雇用創出や地域活性化という建築主の企画に対して、元の耕作放棄地が潜在的に持っていた魅力を発見し、引き出している。土地の高低差を上手く利用し、半地下にワインセラーを設けるなど、敷地条件を効果的に活用し、周囲の環境によく調和した建築となっている。

『広野こども園（ひろば一く）』は、屋根庇の低さと分節された屋根の重なりが、自ずからここが子どもの世界であることを感じさせるスケール感と印象的な外観を持つ。建物内部も、子どもの身体寸法や、活動場所・居場所としてのスケールや素材感を大切に、鉄骨造との組み合わせにより材の寸法や軒高さを抑える工夫、開口部等のデザインの配慮が随所にうかがわれる。また、建物全体の高さを抑えることにより、それが立つ丘の上から海への眺望を確保している。

【特別部門賞】

『蔵の郵便局（栃窪簡易郵便局）』は、昭和初期に建てられ、国登録有形文化財ともなり、地域のシンボルとして親しまれていた土蔵が東日本大震災で大きな被害を受けたことに対し、修復するのに止まらず、新たに地域に開かれた郵便局として生まれ変わらせ、高麗門とともに地域の歴史を継承したものである。建物を残そうとした建築主の決断と思いを受け止め、有識者、設計者、施工者、左官職人らが協働し、職人の技術力により完成した建物は、懐かしくも新しい自然な仕上がりとなっている。この間、その価値や意義を幅広く共有できるように、ワークショップの開催や情報発信等を重ねた関係者の努力は高く評価でき、建築文化の理解、保存再生技術、実現プロセス等が総合されて生み出した成果となっている。

『石川町文教福祉複合施設 モトガッコ』は、廃校となった小学校を、元の3階建から平屋と2階建に減築して耐震性と解放感を高めた上、公民館、図書館、子育て支援施設等の複合施設として再生したものである。手を入れるべき箇所の判断を的確にし、建物内に残した元の学校の面影が、卒業生や地域住民の記憶や思い出を受け止め、改修ならではの地域に密着した建築に仕立て上がっている。学校が担ってきた地域の核としての役割が、設計者、支援組織、町民が一体となったプロセスで継承され、官民一体となって運営されていることは高く評価でき、全国の廃校利用のモデルともなり得るものと言える。

『NIPPONIA 檜山集落』は、山深い限界集落にある築120年の蔵と納屋を、自然の中で生活を楽しむ宿泊施設に改修したもので、その着想は、関係人口を増やすことにより持続可能な地域づくりにも繋がる可能性を持つ。また、活用を通して年数を経た建築の保存を可能とする好事例として社会的価値が認められるものと言える。周囲の景観や土地形状の特色を取り込み、元々の構造材を生かしながら、建物・空間自体をアートとして見せるアイデアが随所に実感できる建築となっている。

【復興賞】

『みんなの交流館 ならは CANvas』は、避難指示が解除された町に帰還する住民のために、そこに行けば皆に会える場として構想された交流施設である。震災からの地域復興に心を寄せる NPO や設計者が住民とのワークショップを重ねながら計画を進め、完成後は運営支援まで行っていることは高く評価できる。周囲に開かれた大きく明るいガラスの箱と、それを覆う木組みのダイナミックな梁と屋根が、住民が集まる地域のリビングとしてのシンボル性や居心地の良さを実現している。また、屋外ステージにつながるサッシは全開放できるようになっており、芝生の広場やキャノピーなど外部空間と一体的に利用することで、人々の交流促進が図られている。

『葛尾村復興交流館あぜりあ ロハス蔵』は、避難指示解除に伴い帰村する人たちのための復興交流館であり、大学の研究室との連携により、敷地内に残っていた土蔵の保存再生とロハスの思想・技術の実践を総合したプロジェクトとなっている。周辺環境の特性や村の古民家の特長である長い一本梁の解体材の利用など、建築や景観に関わる様々な地域資源を生かして計画され、変化に富んだ平面形と屋根の表情の変化が印象的であり、縦ログ工法の量感のある木の壁が温もりのある空間を生み出している。住民参加によって運営方針が検討されたことで、交流館が村の風土と歴史をつなげる絆としても機能している。

『福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校』は、双葉郡内の高校5校が閉校となったのに対し、地域復興を担い、世界に雄飛する若者が学ぶ場を地域にという想いに応えて構想された中高一貫校である。ECC（エデュケーショナル・コンコース）と呼ばれる湾曲した屋外モールを挟んで、教室棟・ホール・アリーナ棟などが敷地の勾配を生かして低層で配置されており、各施設は木造の普通教室棟をはじめ特色ある空間設計がなされ、学校生活の多様な交流や動きを生み出そうとしている。特に中央部に配置された地域協働スペースは、地域の人々に関われ、また NPO が教育を支える拠点ともなっており、地域との共創による新たな高校像を示すものとして高く評価できる。

（※優秀賞、特別部門賞、復興賞については順不同）